

# 本書の利用にあたって

- ◆ 本書は日常診療でよくみられる症状・病態について、各科の専門医がスタンダードと考えられる治療の指針および薬物治療の処方について掲載したものです

## 第 I 章 日常診療で出会う症状・症候へのアプローチ

- 頻度・重要度の高い症状や症候に対して、まず何を考えてどう見分けるのか、以下の見出しや表により診断・対応のポイントを解説。

▼ 既往は？ / ▼ 年齢は？ / ▼ 薬歴は？ / ▼ 対症療法は？ / ▼ 投薬以外にできることは？ / ▼ 夜間だったら？ / ▼ その他のポイントやアドバイス  
① 絶対に使ってはいけない薬は？ / ② 絶対に見落としてはいけないことは？

- 症状・症候の主な鑑別疾患を表形式で掲載。

例) \_\_\_\_\_ ○○の主な鑑別疾患 \_\_\_\_\_

心因性	不安障害	うつ病	燃え尽き症候群			
薬剤	利尿薬	下薬	抗うつ薬	抗不安薬	睡眠薬	降圧薬
⋮			⋮			

## 第 II 章 臓器・疾患別の薬の使い方

- 疾患に対する投薬の基本や治療ガイドライン、各薬剤の概説や位置づけなどを冒頭に掲載。

□ ○○○の投薬の基本 / □ ○○○治療ガイドライン

- 治療に使われる主な薬剤を一覧表で掲載。

例) ○○○病の治療薬

一般名	商品名
① ビグアナイド薬	
メトホルミン塩酸塩	グリコラン <sup>®</sup> 、メルビン <sup>®</sup> 、メデット <sup>®</sup>
② チアゾリジン薬	
ピオグリタゾン塩酸塩	アクトス <sup>®</sup>
⋮	⋮

● 治療に使われる主な薬剤について処方や注意点を掲載。

薬剤分類名	● <b>ビグアナイド薬</b>
一般名 (和文)	<b>メトホルミン塩酸塩</b> metformin hydrochloride (グリコラン®, メルビン®, メデット®)
商品名 (欧文)	
商品名	

<b>剤</b> 剤形	錠：250 mg
<b>用</b> 用法・用量	用 1日2～3回、1回250 mg、最大1日750 mg
<b>適</b> 適応	適 2型糖尿病
<b>機</b> 作用機序	機 肝臓での糖新生の抑制を主としインスリン感受性を改善し骨格筋での糖利用の亢進、消化管からの糖吸収の抑制などにより血糖降下作用を示す
<b>警</b> 警告 (赤太字)	<b>警</b> 重篤な乳酸アシドーシスを起こすことがある。低血糖に注意
<b>禁</b> 禁忌 (赤ゴシック)	<b>禁</b> 乳酸アシドーシスの既往、糖尿病昏睡、腎機能障害、肝機能障害、低酸素血症を伴いやすい状態 (ショック、心不全、心筋梗塞、肺塞栓など)、アルコール過飲、脱水症、高齢者、重症感染症、手術前後、重篤な外傷、妊婦
<b>副</b> 副作用	副 乳酸アシドーシス、低血糖
<b>排</b> 排泄経路	排 主に腎排泄
<b>併</b> 併用 (ゴシック)	
<b>注</b> 注意	
<b>専</b> 上級医・専門医へ相談すべき点	
<b>E</b> エビデンス紹介	

**併** ヨード造影剤を用いて検査を行うときは一時中止、経口血糖降下薬・インスリン製剤との併用による血糖降下作用の増強に注意

**同種薬/類似薬** ▶ ホルミン塩酸塩 (ジベトス®, ジベトスS®)

**アドバイス** ▶ 【適合する症例】インスリン分泌を促進させずに血糖を低下させ、体重が増加しにくく、食欲抑制作用もあるため肥満2型糖尿病によい適応となる。インスリン抵抗性が亢進している病態である境界型やメタボリックシンドロームへの投与も有効である。【使用にあたり注意すべきこと、肝・腎機能低下への使用】きわめてまれであるが乳酸アシドーシスに注意する。乳酸アシドーシス発症の危険性が高くなる状態 (肝腎心肺機能の障害 (特に腎機能障害)、アルコール多飲、高齢) では投与禁忌となる。発熱、下痢などで脱水のあるときには休業する。ヨード造影剤使用時は2日前から中止して造影後に腎機能障害をきたしていないことを確認してから再開する。【妊婦への使用】メトホルミン塩酸

**同種薬/類似薬** ▶ 治療に使われる、その他の同種薬/類似薬を紹介

**使い分け** ▶ 同種薬/類似薬の使い分けの方法を解説

**アドバイス** ▶ 薬が適合する症例、使用にあたり注意すべきこと、肝・腎機能低下例への使用、妊婦への使用、うまくいかないときの対処法などを解説

## 第Ⅲ章 諸科にわたって使われる薬剤

● 薬剤の投薬の基本について、総論的に解説。

総論：○○薬の投薬の基本

● 重要語句や解説が必要な語句について、解説を掲載

例) **キーワード**

**Dose delay**：投与間隔を延期すること

**奏効率**：ある治療法によって、完全反応、部分反応の両者を加えた率をいう

● 複数の科で使う薬剤を総論的に解説。主な薬剤の処方や注意点も掲載

※本書に掲載している参照ホームページのURLは2009年12月時点で確認したものです